

オバマ現象が示したもの

本山美彦[†]

はじめに

2008年の大統領選挙で沸き立ったバラク・オバマ (Barack Hussein Obama, Jr.) への米国人の熱狂的な支持は、「オバマ現象」(the Obama Phenomenon) と呼ばれている。『ニューヨーク・タイムズ』(New York Times) のコラムリスト、ボブ・ハーバート (Bob Herbert) が使ってから、この言葉が定着したと思われる (Herbert [2008])。ハーバートは、歴史上例を見ないような「オバマ現象」(Obama Phenomenon) が起こっているとの興奮した記事を書き、「スーパー・チューズデー」¹⁾ のオバマ人気の沸騰ぶりを伝えた。

オバマ現象は、「自民主党をぶっ潰す」と豪語して日本の若者と主婦を熱狂させた「小泉劇場」の米国版である。

オバマは、現状に対する大衆の不平不満を非常に上手に自らの選挙キャンペーンに取り込んだ。2008年2月5日の「スーパー・チューズデー」での勝利によって勢いづいたオバマは、ヒラリー・クリントン (Hillary Rodham Clinton) との政治上の違いが明瞭ではないのに、若者を熱狂させる面で圧倒的にクリントンとの差を見せつけた。

[†] 大阪産業大学 経済学部 国際経済学科 教授

原稿受理日 10月29日

1) スーパー・チューズデー (Super Tuesday) とは、米国の大統領選挙がある年の、政党の大統領候補をめぐる各州の予備選挙が集中する2月または3月初旬の1つの火曜日のこと。この日は、1日で多数の代議員を獲得することができるので、大統領選でもっと注目される日である。

また予備選挙とは、州政府が公営選挙として実施するもので、大統領選挙や連邦議会議員選挙に先立ち、政党公認候補を決める選挙のこと。予備選挙で選ばれた各州の党代表が、党大会の場でそれぞれの持ち票を推薦候補に投じ、最多数の指名票を受けた者が党公認大統領候補となる (<http://www.whytuesday.org/answer/>)。

08年は2月5日の火曜日がスーパー・チューズデーであった。CNN テレビの集計によると、投票参加者は民主党が1440万人、共和党が870万人と推計され、ヒラリー・クリントン上院議員とバラク・オバマ上院議員の激しい指名争いへの関心が高かったことを示した。投票率は、前回の7%台をはるかに上回る12%台であった。米国では、選挙管理委員会が投票率を集計しないことが多い。08年も推計値であった。予備選段階での投票率は、1桁程度の低水準にとどまるのが通例である (<http://www.yomiuri.co.jp/world/news/20080207-OYT1T00465.html>)。

『ロサンゼルス・タイムズ』(Los Angeles Times)紙で、同紙コラムニストのローザ・ブルックス(Rosa Brooks)はオバマ現象を非常に高く評価した(Brooks [2008])。その要旨を以下に紹介する。

オバマ陣営は、スーパー・チューズデーの2日前の日曜日に開催されたスーパー・ボール²⁾の試合中継中に30秒ものテレビ・コマーシャルを流した。

スーパーボールというスポーツ番組で、しかも、ビールを飲みながらテレビ中継を楽しむ茶の間に、硬派の政治スローガンが流されたのである。このこと自体が米国民の心理的变化を反映するものである。そこで流された「時代を変えよう」というスローガンは、以前の左翼陣営が常套手段としていたものであった。左翼が影響力を失っているなかであって、リベラルとはいえ、間違いなく保守陣営に身を置くオバマが、左翼の言辞を使って、視聴者の心に訴えたのである。しかも、視聴者はそれに違和感を持たなかった。貧困の蔓延と環境破壊に抗議の声を挙げようと、そのコマーシャルは呼びかけた。視聴者の多くは活動家でもなんでもなく、広汎な層の米国民を包含するものであったのに、そのコマーシャルは受け入れられた。

このことは大変なことである。それまでの負け犬的な民主党の姿勢を攻撃的なものに切り替える効果が、このコマーシャルにはあった。それは、周囲にすぐに同調してしまうこれまでの民主党の防衛的な「ミー・トゥイズム」(me-tooism)から積極攻勢に出る気迫を創り出すものであった。

以上のように、ブルックスはオバマを絶賛したのである³⁾。

2) スーパーボールは、米国最大のスポーツ・イベントで、アメリカン・フットボールのプロ・リーグ(NFL=National Football League)の優勝決定戦である。NFLは、NFC(National Football Conference)とAFC(American Football Conference)から成り、この優勝決定戦のおこなわれる日曜日は「スーパーボール・サンデー」と呼ばれ、事実上の祝日になってしまっている。この日は、全米人口の3分の1がテレビ放映にかじりつき、食糧消費量は、感謝祭(Thanksgiving Day=米国では11月の第4木曜日)に次いで多い日であるといわれている(<http://www.ideafinder.com/history/inventions/superball.html>)。この試合の放映におけるコマーシャル代は天文学的数値である。08年のスーパーボールでは、30秒ものCMで280万ドルはかかったとされている(http://money.cnn.com/2007/01/03/news/funny/superbowl_ads/index.html)。

3) ブルックスは、オバマ政権の国防総省政策担当次官(Under Secretary of Defense for Policy)であるミシェル・フルーノイ(Michelle Fluornoy)のアドバイザーに採用された。ブルックスは、『ロサンゼルス・タイムズ』のコラムニスト時には、ジョージタウン大学の法学教授を務めていた。ジョージ・ソロス(George Soros)が主宰するニューヨークの「オープン・ソサイエティ研究所」(Open Society Institute)の特別評議会(Special Counsel)での勤務経験もある。また、国務省法律顧問・ハロルド・コー(Harold Koh)のアドバイザーをも務めた経歴を持つ。彼女の新しいボスのフルーノイは、アルカイダ(al-Qaeda)との戦争指揮の重要人物であり、アフガニスタンにおける戦闘を担当している(http://blogs.telegraph.co.uk/news/nilegardiner/9534208/Rosa_Brooks_the_Pentagon%C3%A2s_far_left_adviser/)。

日本では、藤永茂がそのブログでこの言葉を早くから使っていた（「オバマ現象，アメリカの悲劇（1～4）」；<http://app.blog.ocn.ne.jp/t/trackback/91124/7013941>）。氏はいう。

「ごく荒っぽく捉えれば，白人アメリカの『集団ナルシズム』と表現できるかもしれませんが。（中略）白人アメリカが本当の自分の美しい姿を映していると信じ込んでいる鏡は，実は，悪魔がかざす魔の鏡であり，そこに映っているのはアメリカの本当の姿ではありません。（中略）『オバマ現象』は白人アメリカがバラク・オバマを待ちに待ったメシアとして熱狂的に迎えている現象ではなく，黒人の男をアメリカ合衆国大統領として擁立しようと熱心に努力する自分たちの姿こそ，アメリカ白人の心の正しさ，寛容さ，美しさを映すものであるとする自己陶醉，自己欺瞞こそが『オバマ現象』の真髄である－これが私の言いたい所なのです」（上記ブログ（1）のアップは，2008年2月27日）。

藤永はいう。

「北アメリカに住むアングロサクソン白人の深層心理の中には，その暗い過去に北米大陸先住民とアフリカ系黒人に対して犯した重大な罪過の自覚が潜んでいて，それが時たま浮上して，無意識のうちに，彼等の個人的あるいは集団的行動を左右することがあるのはほぼ確かです。自分を善良な人間と思いたいという誰にもある思いに加えて，過去の罪過の償いをしたい気持，許しを乞いたい気持があるのでしょうか。いまアメリカと世界を騒がせている「オバマ現象」の重大構成要素の一つはそれだと私は考えています」（上記ブログ（2），08年3月5日）。

事実，左翼的評論家として著名なバーバラ・エーレンライヒ（Barbara Ehrenreich）は，「とくに白人は，オバマに贖罪の意識を投影している」と書いた（Ehrenreich [2008]）。

『民衆の米帝国史』（Zinn [2008]）の著者として著名なハワード・ジン（Howard Zinn）は，2006年の論文（Zinn [2006]）で米国人の歴史感覚のなさを嘆いた。米国人は自国の歴史を知ろうとしない。建国の父たちの業績が学校で教えられるだけで，ありのままの歴史を知らない。そのせいで，

「ずらりと並んだマイクロフォンの前で，大統領が『我が国が危ない，民主主義と自由の運命が賭けられている，だから，軍艦と飛行機を派遣して我々の新しい敵を壊滅しなければならない』と宣うたとき，我々には大統領を信用しない理由が見付からないのだ」。

米国は，神によって特別に選ばれ，祝福された「自由と正義」の国であるという集団的幻想に取り憑かれているとジンは批判した。これはありもしなかった「大量破壊兵器」を理由にイラクを叩きつぶした米国の為政者を批判できなかった米国人の心理状態を糾弾する論文であった。

藤永はいう。

「ハワード・ジンが指摘する通り、アメリカという荒れ馬には blinders が装着されているのです」。

「バラク・オバマは、道を踏み外した今のアメリカを本当のアメリカーそんなものは存在しないーに回復する救世主ではなく、アメリカを最終的に地獄の底に引きずり落とすべく、アフリカの地からやってきたアフリカ500年の怨念の化身であるのかもしれない」(上記ブログ (4), 2008年3月19日)。

オバマが、有力な大統領候補者として米国の民主党員に意識されたのは、04年7月27日にボストンで開催された民主党全国大会 (Democratic National Convention) での鮮烈なデビューからであった。このときの演説 (Keynote Address) は「希望がもたらす大胆さ」(The Audacity of Hope) という題であったが、この演説は、確かに、人の心を鷲掴みする見事なものであった⁴⁾ (Obama [2006])。

貧困層救済の草の根社会活動をする人権派弁護士として頭角を現していたオバマは、この演説で、自らの生い立ちに触れながら、理想の米国の実現を訴えた。演説では、「米国という国家が素晴らしいのは、摩天楼の高さや、軍隊の強さや、経済の大きさにあるのではなく、『すべての人間には、平等で自由と幸福を追求する権利がある』という建国の精神に我々が誇りの基礎を置いていることにある」とし、職の海外流出や、最低賃金、健康保険、教育費など、格差が広がる米国社会で特に中流階級以下の人々が直面している問題の解決を掲げた。この演説で大成功を収め、一躍有名になったオバマは、04年11月の上院議員選挙でイリノイの選挙史上に残る70%の得票を得て圧勝した。

オバマの強さは、貧富、人種、イデオロギーの違いを超えてあらゆる層から支持を集められる点にあると『USA トゥデー』(USA TODAY) は指摘した (Kiely [2006])。同紙は次のようにオバマを評した。オバマの元コミュニティー・オーガナイザーの経験が貧困層の人々を引き付け、ハーバード出身で「ハーバード・ロー・レビュー」(Harvard Law Review) 編集者という輝かしいエリートとしての経歴が企業家たちを安心させた。

億万長者の投資家、ウォーレン・バフェット (Wallen Buffett) は、オバマの政治団体に、「私が生きているうちに、早く大統領に立候補してくれないか」と持ちかけたという (http://www.wjwn.org/activities/naganuma/mypage/archive06_13.html)。

オバマの力量の大きさは、多くの賞賛を得ていることから明らかであるが、はたして、分裂含みの米国民を再統一するという米国民の希望だけで、オバマが大統領に押し上げられたのであろうか。上院議員1期目という新人、しかも任期6年のうち、後2年も残し

4) このオバマの演説は以下のサイトで聴くことができる (<http://www.americanrhetoric.com/speeches/convention2004/barackobama2004dnc.html>)。

ていきなり大統領に選ばれた背景には、なにがあるのかが問われるべきである。米国発の世界金融危機を引き起こしたのに、ウォール街のCEOが、いまだに、誰ひとりとして責任を問われていないという点に、オバマ現象を読み解く鍵があると思われる (Andersen [2009])。オバマ現象にはウォール街の仕掛け人がいた。それがロバート・ルービン (Robert Rubin) であった。

そうしたことを明らかにする前に、オバマ現象の発端になった04年7月の民主党全国大会におけるオバマの演説を見ておこう。

1 オバマ現象の発端となった04年7月の演説

『『国の交差点』 (crossroads of a nation) であり、リンカーン大統領を生んだ (Land of Lincoln), 偉大なイリノイ州 (the great state of Illinois) の代表として、私に、ここで演説する榮譽を与えて下さったことに深い感謝の念を述べたいと思います』。(中略)

「私が今このステージの上に立てることは、本当に驚くべきことです。私の父は外国からの留学生でした。彼はケニアの小さな村で生まれ育ちました。山羊飼いをしながら育ち、ブリキ屋根の掘っ立て小屋の学校に通いました。彼の父、つまり私の祖父は、英国人家庭の召使として働いていた料理人でした。しかし祖父は、息子に大きな夢を抱いていました。一所懸命勉強し努力して、私の父は魔法の土地 (magical place), 米国で学ぶ奨学金を得ました。多くの先人にとって、自由と機会の象徴 (beacon of freedom and opportunity) として輝いていた米国に。留学中に父は母と出会いました。母は、ケニアから見て地球の反対側、カンザスで生まれました。母方の祖父は大恐慌時に、石油採掘場と農場で働きました。真珠湾攻撃のあと、祖父は軍隊に入隊し、パットン隊 (Patton's army)⁵⁾ としてヨーロッパに進軍しました。家では祖母が赤ん坊を育てながら兵器工場で働いていました。戦後、祖父母は『復員兵援護法』 (G.I. Bill)⁶⁾ のお陰で学び、連邦住宅局 (FHA=Federal Housing Administration)⁷⁾ を通して家を買いました。そして、機会を求めて西のハワイへと向かいました。彼らも、娘に大きな夢を託しました。共通の夢が、2つの大陸から生まれたのです。私の両親は、奇跡的な愛を分かち合っただけでなく、この国の限りない可

5) ジョージ・スミス・パットン (George Smith Patton, Jr., 1885~1945年) の指揮する部隊。文脈から判断すると、オバマの母方の祖父は、パットンがヨーロッパに進軍したいくつかの戦闘の1つに参加したのであろう。パットンが指揮したヨーロッパにおける戦闘は、1943年8月のシチリア進軍 (米国第7軍)、1944年のノルマンディー上陸作戦では、米国第3軍の指揮を執り連合軍部隊の最西端を担った。強力部隊として有名。しかし、アイゼンハワーからは疎んじられていたらしい (<http://www.generalpatton.com/biography.html>)。

能性への信頼も分かち合っていました。両親は私にアフリカの『祝福』という意味である「バラク」という名前を与えました。なぜなら寛大 (tolerant) な米国においては、名前が成功を邪魔するものではないと信じていたからです」。(中略)

「慈悲深い (generous) 米国では、自らの能力を発揮するのに裕福である必要はないのです」。(中略)

「今夜、私たちは、この国の偉大さを確認するために集まっています。偉大であるのは、摩天楼の高さでも、軍隊の力でも、経済力でもありません。私たちの誇りはとても簡単明瞭な前提、つまり200年前の独立宣言に集約されています。私たちは、これらの真実を自明のものだと考えています。すべての人が、平等に造られ、奪うことのできない権利を授かっていると。人生において自由と幸福の追求する権利があると」。(中略)

「そして親愛なる米国民の皆さん、民主党の皆さん、共和党の皆さん、無党派 (Independents) の皆さん。私は、今夜、あなた方にいます。われわれには、もっとしなければならぬことがあります。たとえば、私がイリノイ州のゲールスバーグ (Galesburg)⁸⁾ で会った労働者たちのために。彼らは、メイタグ (Maytag) 工場⁹⁾ がメキシコに移転したために、職を失ってしまいました」。(中略)

「彼は、彼の息子の薬代のために毎月4500ドルをどうやって払ったらいいのかと悩んで

6) 「復員兵援護法」(G.I. bill=Servicemen's Readjustment Act of 1944) は、フランクリン・ローズベルト (Franklin Roosevelt) の署名によって成立した法律であり、連邦政府によって、90日以上従軍したGIに、失業給付金を給付し、住宅・教育資金を貸し付けることを定めたものである (<http://www.oise.utoronto.ca/research/edu20/moments/1944gibill.html>)。GIとは、米軍兵の俗称。官給品 (government issue) からきた言葉で、豊富な官給品に恵まれた米軍兵を羨望を込めて他国兵から命名された言葉といわれているが定かではない (<http://www.wordorigins.org/index.php/gi>)。

また、退役軍人のために、“52/20 Club” (52週の失業期間において、1週間当たり20ドルが支払われるという意味) という援助制度もできた。こうした法律の整備によって、従軍前までは、大学に進学できなかったり、アフリカからの移民のように、限定した職にしかつかなかったものが、退役後は、大学への進学が可能になり、就職できたり、住宅を入手したりできるようになった。この法律は、いまでも「モンゴメリーGI法」(Montgomery GI Bill) として、軍隊のリクルートの役割をはたしている (<http://www.oise.utoronto.ca/research/edu20/moments/1944gibill.html>)。

7) 連邦住宅局は、住宅ローンの債務保証をする米国政府機関であった。住宅ローンの貸し手 (オリジネーター) が、住宅ローンを出すさいに、ローンの債務者が債務不履行となった場合に、債務者に代わり、これを保証する業務をおこなっていた (<http://www.nomura.co.jp/terms/english/f/fha.html>)。1937年に米国連邦政府によって設立。1965年には、連邦住宅・都市開発省 (HUD=Department of Housing and Urban Development) に統合された (<http://portal.hud.gov/portal/page/portal/HUD/>)。

8) ゲールスバーグは、東部ニューヨークの牧師、ジョージ・ゲール (George Washington Gale, 1789~1861年) が、単純労働者のためのカレッジを作りたいと、教会関係者25人とやってきて1836年に建設したイリノイ州西部にある労働者の町である。現在の人口は約3万人。町を作った翌1837年には、州はノックス・カレッジ (Knox College) の設立を認めた。カレッジは、奴隷を逃亡させる地下組織の役割を担い、リンカーンを支援していた (<http://www.southwind.us/cinderella/galesburg.html>)。

います。薬がないと息子さんの健康を保てないのです」。(中略)

「誤解しないでいただきたいのですが、私が会った人々、小さな町や大都市で、食堂やオフィス街で会った人々は、政府に彼らの問題のすべてを解決して欲しいと知っているわけではないのです。彼らは、前進するのに努力しなければいけないことはよく知っていますし、そうしたいのです」。(中略)

「彼らは知っています。両親が教えなければならないことも、子供に期待をかけ、テレビを消し、若い黒人が本を持っているとは白人のようなおこないだという誹謗中傷を撲滅しなければ、子供が成長できないことも」。(中略)

「人々は、政府にすべての問題を解決して欲しいなどとは望んでいません。ただ、彼らは、心の奥底で、優先順位を少しだけ変えて欲しいと感じているのです。私たちは、できる (we can) はずです。米国のすべての子供がきちんとした人生を送ることができ、機会がすべての人にきちんと開いているようにすることを。彼らは、私たちがよりよくできることを知っているのです。彼らはそれを選択したいのです」。(中略)

「ジョン・ケリー (John Forbes Kerry)¹⁰⁾ は信じています。厳しい労働が報いられる米国を。彼は、仕事を海外に移転する企業が税金を逃れる代わりに、企業がここで仕事を作り出すことを勧めています」。(中略)

「ジョン・ケリーは信じています。すべての国民が、ワシントンの政治家と同じ医療保障を受けられる米国を」。(中略)

「ジョン・ケリーは信じています。エネルギーの自立を。そして石油会社の利益や産油国の妨害行為の犠牲にならないことを」。(中略)

「ジョン・ケリーは信じています。憲法で保証された自由を。それは、世界から羨望の

9) メイタッグ社は、全米第3位の家電メーカー。イリノイ州ニュートンにある同社工場で、新労働協約をめぐる労使交渉が決裂。労働組合は、2004年6月10日(木)からストライキに突入。2004年7月1日(木)、労使間で暫定合意が成立。翌7月2日(金)に組合員投票。4年間有効の新労働協約が正式承認。7月6日(火)から職場復帰がおこなわれた。新労働協約は以下の内容。①2005年にCOLA(物価調整手当)として450ドルを支給、その後は毎年50ドル増額。②2007年6月まで基本給を据え置く。そして2007年6月に2.5%の賃上げをおこなう。ニュートン工場の2004年時点での平均時給は19ドルであった。③企業業績に応じてボーナス支給。④これまで全額会社が負担してきた医療保険料の1~2割を労働者が負担する。⑤新規採用者は、もはや現役労働者が加入している確定給付年金に加入することができない。新規採用者には、401(k)が提供される(http://www32.ocn.ne.jp/~everydayimpress/New_Folder/article272.html)。しかし、オバマ演説に見られるように、多くの労働者が解雇された。

10) ジョン・フォーブズ・ケリー(1943年生まれ)は、マサチューセッツ州選出上院議員。2004年の米国大統領選挙で、民主党の大統領候補に指名された。この年に大統領選を争ったジョージ・ウォーカー・ブッシュ(George Walker Bush, 1946年生まれ)とは遠い縁戚にあたる(<http://www.ancestry.com/landing/strange/bush4/tree.html>)。

まなざしを受けています。そして、彼は、絶対に基本的自由を犠牲にしたり、われわれを分かち契として信仰を利用しないでしょ。ジョン・ケリーは信じています。危険な世界情勢において、戦争は、時々選択肢の1つにはなるものの、第1の選択肢であるべきではないことを」。 (中略)

「ジョン・ケリーは米国を信じています。そして彼は知っています。それは何人が繁栄するだけでは不十分だということ。米国は個人主義で有名ですが、米国の歴史の中には、別の要素があります。私たちはすべて、1つの国民としてつながっているのです」。 (中略)

「われわれが夢を追い、1つの米国の家族として結集することを、ケリーは信じています」。 (中略)

「ケリーは信じています。ここにはリベラルの米国も保守の米国もなく、米合衆国があるだけだと。黒人の米国も白人の米国もラテン人の米国もアジア人の米国もなく、米合衆国があるだけだと」。 (中略)

「イラク戦争に反対した愛国者も、イラク戦争を支持した愛国者も、私たちはみな、星条旗に忠誠を誓っています。私たちはみな、米合衆国を守っています」。 (中略)

「私は盲目的な楽観主義に与して話しているわけではありません。失業はいつかどこかに消えてなくなると楽観したり、問題を意図的に無視するつもりは私にはありません。医療の危機は、無視することによって、解決されるものではないでしょう。私が話していることは、そんなことではないのです。私が話しているのは、もっと実質的なことです。それは、火の回りに座り自由を歌う奴隷たちの希望であり、遠い国々へ旅に出る移民の希望であり、メコンデルタを勇敢にパトロールする若い海軍大尉の希望であり、不平等に屈服しない工場労働者の息子の希望であり、米国に自分の居場所があると信じるやせこけた奇妙な名前の子供 (オバマ) の希望なのです。その希望とは、困難をものともせず、不確実性をものともしない希望です。希望がもたらす大胆さ (the audacity of hope!) を、私は、語りたいのです」。 (中略)

「私は信じています。われわれが中産階級に安心を与え、労働者階級に機会を与えられると。私は信じています。私たちが無職の人に仕事を与え、家のない人に家を与えることができる。暴力と絶望にある都市の若者を更生させることができる。私は信じています。私たちは正義の追い風を受け、この歴史の転換点に、正しい選択ができることを。そしてわれわれが直面する難題に立ち向かうことができることを」 (<http://www.americanrhetoric.com/speeches/convention2004/barackobama2004dnc.html>)。

以上がオバマを有名にした04年7月の演説の要旨である。貧富格差に苦しみ、正義がなくなりつつある米国を、自由・機会・繁栄という共通の価値観の下に、すべての人々に開

かれた国にすべく、人々は連帯しようという、非常に分かりやすい言葉で語ったオバマの演説は、聴衆を驚喜させた。この「自由・機会・繁栄」というキーワードは、建国の理念であり、ハリー・トルーマン (Harry S. Truman) 大統領の1951年の議会への年次報告でも用いられたように (Truman [1951]), 歴代大統領の多くが復唱してきた国民を鼓舞する常套句である。

2 バラク・オバマの経歴と閣僚人事のもたつき

オバマは、1961年8月4日に、ハワイ州ホノルルで出生。実父のバラク・オバマ・シニア (Barack Obama, Sr.) (1936~82年) はケニア出身。母親はカンザス州ウィチタ (Wichita) 出身の白人、アン・ダナム (Stanley Ann Dunham)。上記の演説にもあるが、父のオバマ・シニアは奨学金を受給していた外国人留学生であった。2人はハワイ大学のロシア語の授業で知り合い、1961年2月2日に結婚。

息子のオバマ自身は現在プロテスタントのキリスト合同教会 (United Church of Christ) に属していた (大統領選中に離脱) が、父はムスリム。ただし、ほとんど無宗教に近かった。

両親は、1964年に離婚。ハワイ大学とハーバード大学を出た父は1965年にケニアに帰国し、政府のエコノミストとなる。1982年に自動車事故で亡くなった。46歳であった。

母は、離婚後に人類学者となり、その後ハワイ大学で知り合ったインドネシア人の留学生 (のちに地質学者となったロロ・ソエトロ, Lolo Soetoro) と再婚する。

1967年に、ソエトロの母国であるインドネシアで、スハルト (Suharto, 1921~2008年) による軍事クーデター (9月30日) が勃発し、海外留学していたインドネシア人は、母国に呼び戻され、一家はジャカルタに住むことになった。子オバマは6歳から10歳までジャカルタで育った。1971年、子オバマは、母方の祖父母と暮らすためにホノルルに戻り、地元の有名私立小中高一貫のプナホウ・スクール (Punahou School) に編入学し、1979年の卒業まで5年間の教育を受けた。

1972年に、母のアンがソエトロと一時的に別居し、実家のあるハワイ、ホノルルに帰国、1977年まで滞在。同年、母は子オバマをハワイの両親に預け、人類学者としての仕事をするためにインドネシアに移住し、1994年まで現地に滞在した。1980年、アンとソエトロとの離婚が成立。母のアンはハワイに戻り、1995年に卵巣癌で亡くなった。

子オバマは、高校を卒業後、カリフォルニア州ロサンゼルス市の私立オクシデンタル・カレッジ (Occidental College) に入学。2年後、ニューヨーク州のコロンビア大学に編入。政治学、

とくに国際関係論を専攻。1983年に同大学を卒業後、ニューヨークで出版社やNPOのビジネス・インターナショナル(Business International Corporation), ニューヨーク・パブリック・インタレスト・リサーチ・グループ(New York Public Interest Research Group)に勤務。4年間のニューヨーク生活のあと、イリノイ州のシカゴに転居。1985年6月から88年5月まで、教会が主導する地域振興事業(DCP=Developing Communities Project)の管理者として勤務。1988年にケニアとヨーロッパを旅行し、ケニア滞在中に実父の親類と初めて対面。同年秋にハーバード・ロー・スクールに入学する。1991年、同ロー・スクールを修了後、シカゴに戻り有権者登録活動(voter registration drive)に関わったのち、弁護士として法律事務所に勤務。1992年に、シカゴの弁護士事務所で見合ったミシェル・ロビンソン(Michelle Robinson)と結婚。2人の娘をもうけた。

1995年には、自伝(Obama [1995])を出す。シカゴ大学ロースクール講師として米国憲法を1992~2004年まで講じた。

貧困層救済の草の根社会活動で頭角を現し、1996年、イリノイ州議会上院議員に選出され、2004年1月まで務めた。2000年には連邦議会下院議員選挙に出馬するも、オバマを「黒人らしくない」と批判した他の黒人候補に敗れた。

2003年1月、イリノイ州上院議員選挙に民主党から出馬表明、2004年3月に7人が出馬した予備選挙で53%を獲得し、同党の指名候補となった。対する共和党指名候補は私生活スキャンダルにより撤退し、急遽別の共和党候補が立つが振るわず、2004年11月には、共和党候補を得票率70%対27%の大差で破り、イリノイ州選出の上院議員に初当選した。アフリカ系上院議員としては史上5人目(選挙で選ばれた上院議員としては史上3人目)であったが、この時点で現職アフリカ系上院議員はオバマ以外にいなかった。

2004年の米国大統領選挙では、上院議員のジョン・ケリーを大統領候補として選出した04年民主党党大会(マサチューセッツ州ボストン)の2日目(7月27日)に上記で説明した基調演説をおこなった。この時点では、オバマは、イリノイ州議会上院議員の席を持っていたが、まだ米国上院議員ではなく、単なる民主党指名候補であった。「イラク戦争に反対した愛国者も、支持した愛国者も、みな同じ米国に忠誠を誓う『米合衆国人』なのだ」と語った上記演説模様は、全米にテレビ中継され、長年の人種によるコミュニティの分断、2000年大統領選挙の開票トラブル、イラク戦争を巡って先鋭化した保守とリベラルの対立、等々を憂慮する米国人によりこの演説は高い評価を受けた。

2004年以降、2008年の米大統領選挙の候補として推す声が、地元イリノイ州の上院議員や新聞などを中心に高まっていた。そして、06年10月、NBCテレビのインタビューに「出馬を検討する」と発言。翌07年1月に、連邦選挙委員会に大統領選出馬へ向けた準備委員

会設立届を提出 (出馬表明)。米上院議員の1期目でまだ2年しか経っていなかった。まったくの新人が大統領指名候補に名乗り出たのである。正式立候補声明は、07年2月10日、地元のスプリングフィールド (Springfield) にて出された。

出馬の演説で、オバマは、医療保険制度や年金制度、大学授業料、石油への依存度を取り組みが必要な課題として挙げ、建国当初のフロンティア精神へ回帰することを呼びかけた (Full Text of Senator Barack Obama's Announcement for President, Springfield, IL, February 10, 2007; http://www.barackobama.com/2007/02/10/remarks_of_senator_barack_obam_11.php)。

オバマは、グローバル資本主義に懐疑的であった。グローバル資本主義こそが、米国内にブルーカラーを中心に大量の失業者を生んだ原因であると認識し、新自由主義経済政策の象徴である北米自由貿易協定 (NAFTA) に反対し、国内労働者の保護を訴えるなど、主な対立候補となったヒラリー・クリントンよりもリベラルな政治姿勢を示していた。選挙選の最中、オバマが頼みとするトリニティ・ユナイテッド教会 (Trinity United Church of Christ) の牧師たちによる相次ぐ失言 (政敵ヒラリーを人種差別主義者だとして糾弾) に失望したオバマは、20年間在籍していた同教会から、08年5月31日に、「私は教会を非難しないし、教会を非難させたがる人々にも関心がない」が、「選挙運動によって教会が関心に晒され過ぎている」として、教会から脱退した (Sweet [2008])。2008年11月4日におこなわれた米大統領選挙で勝利したのちになって、オバマは、同月16日、上院議員 (イリノイ州選出) を辞任した (<http://www.biography.com/articles/Barack-Obama-12782369>)。

しかし、政権発足後、オバマが指名したスタッフらによる不祥事の発覚が相次いだ。財務長官 (U. S. Secretary of the Treasury) 候補のティモシー・フランツ・ガイトナー (Timothy Franz Geithner)、保健福祉長官 (U. S. Secretary of Health & Human Services) 候補のトム・ダシュル (Thomas Andrew Daschle)、行政監督官 (Head of U. S. Government Accountability Office (GAO) 候補のナンシー・キルファー (Nancy Killefer) に納税漏れが発覚した。ダシュルに至っては、支持者からのリムジン提供も批判された。議会から糾弾されたダシュルとキルファーは指名を相次いで辞退した。批判を浴びたオバマは、ダシュル指名を「大失敗」だったと認めて謝罪した (『朝日新聞』2009年2月5日付)。ガイトナーは時間がかかったが、議会の承認を得た。

商務長官 (U. S. Secretary of Commerce) 候補も、指名者が次々に辞退するという失態劇が繰り返された。最初に指名されたビル・リチャードソン (William Blaine "Bill" Richardson III) は、献金を受けた企業が捜査対象となり、連邦議会での承認手続き前に

指名を辞退した（産経デジタル，2009年1月5日）。

次に指名された共和党員のジャド・アラン・グレッグ（Judd Alan Gregg）は、オバマとの政策的な対立が解消せず、指名を辞退した（産経デジタル，2009年2月13日）。

また、国家経済会議議長（Director of the National Economic Council）のローレンス・サマーズ（Lawrence H. Summers）が、米国のヘッジファンド大手のD.E. ショウ（Shaw）から顧問料として年間520万ドル超の収入を得ており、さらにリーマン・ブラザーズ（Lehman Brothers）やシティグループ（Citigroup）から講演料との名目で年間約277万ドルを受領していたことが、ホワイトハウスによる資産公開で明らかにされた（米山雄介「米経済会議サマーズ氏，ファンドから5億円，政権入り前，政策へ影響懸念も」『日本経済新聞』2009年4月5日付）。

大統領選挙中、オバマは、子ブッシュ政権の外交官（特命全権大使）¹¹⁾ 人事に対して「政治利用しすぎる」（古森義久「オバマ論功人事？，新大使候補6割外交経験なし，大口献金者多く」『産経新聞』2009年7月6日付）と強く批判していた。しかし、オバマも同じであった。オバマが指名した特命全権大使のうち、職業外交官以外が占める割合は、子ブッシュ政権では3割程度に過ぎなかったのに対し、オバマ政権では6割を占めている（上記，古森記事）。過去の歴代政権と比較しても、その割合は突出している。実際、オバマに対する大口献金者が主要国大使に指名された。以下に紹介する各国駐在大使はすべて50万ドル以上を選挙資金として集めた人達である。

駐日大使のジョン・ルース（John Victor Roos）は、その代表的な人物。上院議員になったばかりのオバマは、2005年初め、「バラク・オバマと会ってみませんか」という会合を始めた。サンフランシスコでの会合には、2004年の大統領選挙で敗れたケリー候補の大口献金者20人が集まった。ジョン・ルースもそのひとりだった。2年後の2007年、大統領選挙出馬を決めたオバマを応援するため、ルースは自宅にシリコンバレーの実業家ら100人を招き、1晩で30万ドルを集めた。カリフォルニア州北部の資金調達責任者となった。カリフォルニア州は全米で最多の資金を集めたといわれている（<http://www.zimbio.com/John+Roos>）。

弁護士のルースは、1985年に、当時は小規模だった法律事務所ウィルソン・ソンシニ・グッドリッチ&ロサティ（Wilson Sonsini Goodrich & Rosati=WSGR）入りした。ルース

11) 特命全権大使（Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary）とは、外交使節団の長で最上級の階級。受け入れ国の元首に対して、外交交渉、全権代表としての条約の調印などをおこなう。国連などの国際機関の政府代表部に対しても派遣される。職業外交官でない各国駐在大使のことを指す場合が多い（<http://encyclopedia.farlex.com/Ambassador+Extraordinary+and+Plenipotentiary>）。

は、IT (情報技術)、電機、バイオ分野に強い企業金融の専門家として頭角を現した。グーグル (Google) やアップル (Apple) など大手企業だけでなく、ユーチューブ (Youtube) などベンチャー企業も顧客として開拓した。WSGR を有力事務所に成長させた同氏は、2005年には最高経営責任者 (CEO) に就いた。同社は、50社以上の日本企業とも契約している (『日本経済新聞』2009年5月21日付)。

フランス大使は、ジム・ヘンソン・カンパニー (Jim Henson Company) という有名なプロダクション社長のチャールズ・リブキン (Charles Rivkin)。ソロモン・ブラザーズ (Salomon Brothers) 出身 (<http://diplopondit.blogspot.com/2009/05/officially-in-charles-rivkin-to-paris.html>)。

英国大使は、シティグループ・グローバル・マーケット (Citigroup Global Markets) 元副社長のルイス・サスマン (Louis Susman)。「電機掃除機」と称されるほど、04年のケリー陣営で莫大な資金を集めた達人である (<http://www.telegraph.co.uk/news/worldnews/northamerica/usa/barackobama/5401840/Profile-Louis-Susman-the-new-US-ambassador-to-Britain.html>)。

英紙『タイムズ』(Times) は、「クローニー資本主義を批判してきたオバマが、大口献金者のトップ10人を各国大使に指名した」と痛烈に批判した (http://www.timesonline.co.uk/tol/news/world/us_and_americas/article6376633.ece)。

スイス大使は、米国外国車ディーラー連盟 (American International Automobile Dealers Association) 会長で、ボルボやローバーの販売店を経営しているドナルド・バイヤー (Donald Beyer)。ボルボを扱っているのに、スウェーデン大使にすればよかったのにと、新聞で揶揄された (<http://www.washingtoncitypaper.com/blogs/citydesk/2009/04/07/don-beyer-also-not-named-ambassador-to-swedenyet/>)。

そのスウェーデン大使には、著名インターネット企業、ブリックパス (Brickpath) 代表のマシュー・バーザン (Matthew Barzun) (<http://thevillevoice.com/2009/06/19/just-announced-ambassador-matthew-barzun/>)。

ベルギー大使のハワード・ガットマン (Howard Gutman) は、巨大法律事務所、ウィリアムズ&コノリー (Williams & Connolly) のパートナー (<http://www.huffingtonpost.com/howard-gutman>) であった。

3 不透明な選挙資金

バラク・オバマ大統領が大統領選で集めた選挙資金は、史上最高額の7億4500万ドルであった (http://www.fec.gov/DisclosureSearch/MapAppCandDetail.do?detailComeFrom=mapApp&cand_id=P80003338&cand_nm_title=Obama,%20Barack)。それだけではない。公的助成を受け取らずに当選した史上初の大統領でもある。

米国では、政党内の大統領候補を選ぶ選挙も含めて、企業や労組から候補者への直接献金が禁じられている。つまり、選挙資金は個人献金から賄われる。その個人献金もほとんどの場合、2300ドルが上限になっている。そして、献金者1人について、250ドルが、米財務省の管理する特別基金（マッチング・ファンド=matching fund）から、候補者に助成金として支給される。しかし、公的助成を受けると、支出内容が法的に制約されてしまう（草野厚研究会第二班「大統領選挙から見る現在のアメリカ」, <http://web.sfc.keio.ac.jp/~bobby/klab/hokokusho/election.pdf>）。

共和党の大統領候補、ジョン・マケイン上院議員は、約2億8400万ドルを集め、それに対応する公的資金を約8400万ドル受け取り、総額3億6900万ドルの選挙資金を得た (http://www.fec.gov/DisclosureSearch/MapAppCandDetail.do?detailComeFrom=mapApp&cand_id=P80002801&cand_nm_title=McCain,%20John%20S) が、オバマは受け取らなかった。公的助成を受け取らない方が、選挙戦での自由度が増すからである。

米国では、どれだけの選挙資金を集めたかがジャーナリズムで大々的に宣伝され、多くの資金を集めた候補者がそれだけ有利になる。そのために、支持者は懸命に献金することになる。結果的には莫大な選挙資金が集まることになる (<http://business.nikkeibp.co.jp/article/topics/20090310/188698/?P=1~3>)。

大口献金者（big donor）というのは、上限2300ドルの献金しかできない個人を多数まとめ得た人のことを指している (<http://japan.usembassy.gov/j/p/tpj-20080123-02.html>)。

オバマ陣営は、豊富な資金をテレビでの宣伝費に投入した。衛星放送のディッシュ・ネットワーク（Dish Network）に「オバマ・チャンネル」（Obama Channel）を設定し、大統領選挙の6日前、つまり、2008年10月29日、地上波テレビのNBCやCBS、Fox、ケーブルテレビのMSNBC、BET、TVワン（One）、スペイン語放送のユニビジョン（Univision）等々の米東部時間での午後8時のゴールデン・アワーズを買い取った。ただし、ABCは拒否した。

選挙戦終盤でこれほど長時間にわたり、単独候補を前面に押し出した「放送枠買取り」は滅多に見られない。1992年にインディペンデント候補として出馬した大富豪のロス・ペロー（Henry Ross Perot）でさえ、オバマのようにケーブルテレビまで包括的に取り込む

企画はできなかった。まさに前代未聞のテレビ広告戦略であった。

選挙広告に使った費用を見ると、マケイン陣営の1億3000万ドルに対し、オバマ陣営は3億9000万ドルと圧倒した。

米国の国民的スポーツであるメジャーリーグ (MLB) の頂上決戦ワールドシリーズ、フィラデルフィア・フィリーズ対タンパベイ・レイズの第5戦。フィリーズが28年ぶりのシリーズ優勝に王手をかけたが、雨天のため6回表のレイズの攻撃で試合中止となった (<http://jbpres.ismedia.jp/articles/print/206>)。

08年10月29日に再開された第6戦の開始時間は、8分間遅らせられた。米民主党の大統領候補オバマ上院議員のテレビ出演のためであった (<http://sankei.jp.msn.com/sports/mlb/081017/mlb0810170958003-n1.html>)。

オバマの選挙選は、史上最大の300万人を超える小口献金者達 (平均献金額100ドル以下) によって支えられたものであると、オバマ陣営は豪語していた。しかし、この数値はごまかしであった。100ドル以下の献金者の比率は、連邦選挙管理委員会 (Federal Election Commission) に提出されたデータで見ると、2004年のブッシュ陣営の実績よりも小さかったのである (“Obama Donors Pick Up Pace: A \$32 Million Month,” *Washington Post*, February 1, 2008)。

法的には個人献金の上限は2300ドルに制限され、格別の個人的理由があればさらに2300ドルの積み増しが認められている。しかし、現実には膨大な金額が献金として選挙主宰者の手に渡っている。これは「合同基金募集委員会」(joint fundraising committees) なるものが抜け穴として積極的に利用されているからである。

マケイン陣営は「マケイン勝利2008」(McCain Victory 2008) を利用した。オバマも「オバマ勝利ファンド」(Obama Victory Fund) を設立して、個人献金をここに集約させた。ここに集めた基金は選挙に直接回されるだけでなく、党運営に、あるいは地方組織にまわせることができ得るという、用途に柔軟性が付与された資金である。この組織に献金するならば、個人の献金は2万8500ドルまで可能であるとされている。さらに民主党は「変化委員会」(Committee for Change) というものを作った。この基金へなら、個人は、6万5500ドルを上限として献金できる (*Washington Post*, October 22, 2008)。

これだけの膨大な金額が大統領キャンペーンでテレビ局に入る。しかも、オバマが勝利してもまだ莫大な金額をオバマ陣営は懐に入れていた。いくらでもテレビ宣伝費用にそれらを支出することができるのである (Amy Goodman, “Change Big Donors Can Believe In,” http://www.truthdig.com/report/item/20081022_change_big_donors_can_believe)。

オバマは、まさにウォール街の献金で大統領選に勝利したと、なんと、『ウォールストリー

ト・ジャーナル』紙に書き立てられたのである (Cooper & Mullins [2009])。

おわりに

オバマが始めた戦争ではないが、米国は、少なくとも09年10月段階では、イラクで、アフガニスタンで戦争当事者であった。ところが、戦争の一方の当事者のオバマ大統領へのノーベル平和賞 (2009 Nobel Prize) の授与が決定した。大統領就任後9か月も経っていなかったのにである。

『ロサンゼルス・タイムズ』紙は、09年10月10日の社説でこの授賞決定を批判した。

「私たちは、オバマ大統領を支持し、彼の前任者よりもはるかに好んでいるが、なぜ就任直後にノーベル平和賞の授与を決定したのか分からない。ノーベル委員会は、オバマ大統領を当惑させて、賞自らの信頼を損なった」。

翌日の11日に同紙がおこなったオンライン世論調査によると、回答者の46%が「オバマ大統領は賞の受賞を断らなければならない」といていた。

9日の『ワシントン・ポスト』紙の批判も厳しかった。「(これは) 慌てて授与したおかしな平和賞」であり、「イラン大統領選挙不正に抗議して亡くなったイラン女子大生などの、他の候補が明らかにいながら、なぜノーベル委員会が今回の決定を下したのか分からない」。

同紙による9日の、3万7675人へのオンライン世論調査では、56%が今回の受賞に反対していた。投票者の中には、「インドのマハトマ・ガンジーさえ平和賞を受け取れなかったのに、政治的には新人のオバマが受けたことにより、ノーベル賞の権威を自ら貶めた」という意見もあった。

10日の『ウォールストリート・ジャーナル』紙は、10日付のコラムは酷評した。

「今回の授与は邪悪で無知。ノーベル委員会は、たんに、オバマがジョージ・W・ブッシュでないだけで賞を与えた。平和賞が『尊敬の対象』から、『冷やかしの種』に転落した」(以上は、http://news.searchchina.ne.jp/disp.cgi?y=2009&d=1012&f=national_1012_012.html による)。

ノーベル平和賞選考委員会の議長は、トルビョルム・ヤーグラント (Thorbjorn Jagland) である。彼が説明した授賞理由は、「尋常でない国際外交と人々の協調を強化したことによる」とし、記者会見で「全会一致の決定だ。大統領が唱える政策こそ長年、委員会が目指してきたものだ」と語り、「これで大統領は世界を主導するスポークスマンになった」と話した (<http://news.goo.ne.jp/article/sankei/world/m20091010043.html>)。

出席した記者たちは辛辣な批判をヤーグラント議長に浴びせた。

「約束を履行するだけの任期をオバマ大統領は与えられていないではないか」という質問に対して、議長は、ノーベル賞はそうした姿勢を支持するというのが伝統であると答えたのみであった。

「オバマはアフガニスタン侵攻の中心人物である。その点について選考委員はどのような見解を持つのか」という質問には、紛争が解決される機運が生じることを願っていると解答を逸らせた。

ちなみに、オバマは、1906年のセオドール・ローズベルト (Theodore Roosevelt, 1858～1919年)、1919年のウッドロー・ウィルソン (Woodrow Wilson, 1856～1924年) に続く三人目のノーベル平和賞受賞大統領である¹²⁾。

ベストセラー、『ザ・ショック・ドクトリン』(Klein [2007]) の著者、カナダのナオミ・クライン (Nomi Klein) もオバマの授賞を酷評した。

この授賞は、ノーベル賞を貶めるものだ。いままでもそうであったし、これからもノーベル賞委員会はノーベル賞を貶め続けるであろう。彼らは具体的な行動に対してではなく、単なる希望を述べただけの人 (注、オバマのこと) を励ますために賞を授けた。世界には具体的な行動によって、平和を実現させようとしている人がある。それも危険を冒して。そういった人々にノーベル平和賞は考慮を払うべきであった。

たとえば、コンゴの残酷な女性レイプ問題に命を張って阻止しようとしている人たちがいる。ムケゲ (Mukwege) 医師もそのひとりである¹³⁾。もし、ムケゲがノーベル平和賞を授与されていたら、どれほど多くの難民に希望をもたらしていただろうかと、クラインは力説した (http://www.democracynow.org/2009/10/9/as_us_continues_afghan_iraq_occupations)。

国内政治も世界政治も巨大マスコミの手で操作されるようになって久しい。歴史は、マスコミ操作術で際だった技術を駆使した代表としてオバマ陣営を語ることになるだろう。時代は、まさに、「オバマ現象」の様相を呈している (http://huzi.blog.ocn.ne.jp/darkness/2008/02/post_01be.html)。

12) ノーベル平和賞 (Nobel Peace Prize) は、アルフレッド・ノーベル (Alfred Bernhard Nobel, 1833～1896年) によって創設された5部門 (物理学賞、化学賞、生理学・医学賞、文学賞、平和賞。ちなみに経済学賞はノーベル賞ではなく、「アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン銀行賞」である) の賞の1つであるが、アルフレッド・ノーベルはスウェーデンとノルウェー両国の和解と平和を祈念して、「平和賞」の授賞は、ノルウェーでおこなうことにした。

セオドール・ローズベルトの授賞理由は、1905年の日露戦争終結のポーツマス条約 (Treaty of Portsmouth) の斡旋の功績による。ウッドロー・ウィルソン は、有名な1918年「14か条の平和原則」で国際連盟創設につながった功績で授賞した (<http://nobelprizes.com/nobel/peace/peace.html>)。

13) コンゴ民主共和国 (Democratic Republic of Congo, 旧ザイール) の博士、医師であるデニス・ムケゲ (Denis Mukwege) が人権運動家の心を捉えている。パンジー (Panzi) に病院を建設し、同国で数十万人にのぼるといわれる性的暴力被害者の女性のケアをおこなっている。元国連人道問題担当事務次長でノルウェー国際問題研究所 (Norwegian Institute of International Affairs) のヤン・エグランド (Jan Egelangd) によると、現在のアフリカ諸国には集団レイプという「忘れられた戦争」があると指摘している (<http://www.afpbb.com/article/life-culture/life/2526553/3411170>)。

2008年1月13日、CBSの「60分」(60 minutes) で詳しく報道された (“War Against Women – The Use Of Rape As A Weapon In Congo’s Civil War”, 2008年8月14日、再放送)。かなりきわどい表現もあるので、端折って要約しよう。

ここ10年、コンゴでは何十万人もの女性がレイプされている。多くは集団暴行だ。パンジ病院は、被害者等で一杯になっている。病院で治療しているのは大人だけではない。「子供もいる。一番若いのは3歳だったと思う」とデニス・ムケゲ医師はいった。

10年以上も前に、隣国のルワンダ (Rwanda) で100万人近い人々が殺された大虐殺があった。それはコンゴにも波及した。それ以来、コンゴ軍、外国の支援を受けた反乱軍、地元の民兵がお互いに権力と土地を求めて戦っている。世界最大の金、銅、ダイヤモンド、錫の鉱脈をめぐるいさかいである。現在ではコンゴのミッションは国連史上最大の平和維持活動になっている。

2005年以来、約1万7000人の国連軍と職員が常駐しているが平和は訪れていない。戦闘に続き、略奪とレイプが繰り返されている。07年には50万人以上の人々が立ち退きさせられた。

CNNの記者、アンダーソン・クーパー (Anderson Cooper) が訪れたあるキャンプは、2か月前にできたばかりなのに、すでに超満員であった。そして、まだ増え続けていた。戦争が広まったため、より多くの暴力が蔓延し、レイプは日常茶飯事になってしまった。レイプは大規模かつ組織的、残虐なものである。恐怖の見せつけである。レイプが戦争の武器として使用されている。

クーパー一行は、ワルング (Walungu) と呼ばれる、コンゴ東部にある山の孤立した村に向かった。長年、武装グループがこの地域で戦闘を展開している。何千もの男が森から現れて、村人を脅して女性たちを奪っていく。ある村では、女性の90%がレイプされた経験を持つ。村の男たちはたいい武器を持っておらず、反撃することができない。

「私はかつて男たちが逃げるのは無責任だと思っていた。しかし、いまは違う」。ムケゲ医師はクーパーに語った。「男たちは、彼らの妻がレイプされたから逃げるのではない。彼ら自身がレイプされたように感じるから逃げるのだ。彼らはトラウマを抱え、屈辱を感じている。なぜなら、妻や子供たちを守るために何もできなかったからだ」。

同医師はいう。「これは力、武力の誇示なんだ。人間を破壊するためのだ」と。

紛争が広まるにつれて、次第に一般市民もレイプするようになった。いくつかの色あせた看板にはレイプは犯罪であると書かれているが、コンゴ警察がこの問題を深刻に捉えているという証拠はほとんどない。これまでに裁判にかけられた事件はほとんどない。刑務所には、フェンスもなく、見張りもない。ここでは、レイプをしても、まったくとがめられないし、殺人を犯してもとがめられない。逮捕される可能性はゼロである。

パンジ病院では毎朝、みんな集って大声を上げ、礼拝で歌を歌う。我々の現世での苦しみは天国で解放される、と彼女らは歌う。

【参考文献】

- Andresen, Steven [2009] , “Obama and his Critics, Wall Street Corruption,” *Touchy Subjects*, September 3; http://shandresen.typepad.com/touchy_subjects/2009/09/obama-and-his-critics-wall-street-corruption.html
- Brooks, Rosa [2008] , “A national mood swing: Change isn’t just a political slogan, it’s a national yearning that’s put the Democrats back on the offensive,” *Los Angeles Times*, February 07.
- Cooper, Christopher & Brody Mullins [2009] , “Wall Street Is Big Donor to Inauguration: Obama Bans Funding From Corporations and Big Donors, but Financial Employees Put Up \$5.7 Million,” *Wall Street Journal*, January 9.
- Ehrenreich, Barbara [2008] , “Unstoppable Obama,” *Huffington Post*, February 14.; http://www.huffingtonpost.com/barbara-ehrenreich/unstoppable-obama_b_86677.html
- Herbert, Bob [2008] , “The Obama Phenomenon,” *New York Times*, January 5.
- Kiely, Kathy [2006] , “Democrats See Obama As Face of Reform and Change : Junior Senator Poised to Step into National Spotlight” , *USA Today*, March 6.
- Klein, Naomi [2007] , *The Shock Doctrine: The Rise of Disaster Capitalism*, Knopf.
- Obama, Barack [1995, 2004] , *Dreams from My Father: A Story of Race and Inheritance*, Three Rivers Press. 邦訳, 白倉三紀子・木内裕也訳『マイ・ドリーム』ダイヤモンド社, 2007年。
- Obama, Barack [2006] , *The Audacity of Hope: Thoughts on Reclaiming the American Dream*, Crown.
- Sweet, Lynn [2008] , “Barack Obama quits Trinity United Church of Christ,” *Sun-Times*, June 1.
- Truman, Harry [1951] , *Fourth Annual Message to the Congress on the State of the Union*, January 8. The Public Papers of Harry S. Truman 1945-1953, Truman Library & Museum.
- Zinn, Howard [2006] , “America’s Blindness,” *The Progressive Magazine*, April.
- Zinn, Howard [2008] , *A People’s History of American Empire*, Metropolitan Books.

What the Obama Phenomenon Has Implied

MOTOYAMA Yoshihiko

Summary

As *New York Times* columnist Bob Herbert pointed out, what the Barack Obama phenomenon has implied is a new movement that America has never seen. Obama aired a 30-second Super Bowl ad that drew unabashedly on the manner of campaign of the American left, offering images of protest marches, of poverty and environmental destruction, of the devastation of war and of beaming, hopeful, multiracial crowds. Whatever the causes, Americans seem eager to reclaim a spirit of idealism that many thought ended with the 1960s. Obama is firmly within the moderate mainstream of the Democratic Party and largely indistinguishable from Clinton. But the resonance he found for his calls for “change” set him apart. The symbolism of past social movements is now more likely to give Americans a thrill than a chill. Obama’s electoral success suggested that his campaign correctly read the national mood. But this kind of mood would be short-lived. In fact America’s enthusiasm has been tempered by Obama’s nomination of his supporters for ambassadors.